体験通し自身を育てる

高校の修学旅行や教育旅行は、見る行為から一歩進んで自ら五感を使い、何かを感じ取る体験が主流になってきた。さらに、核家族化で希薄になった人間関係を、肌で感じる民泊も人気が高い。一方で、多感なこの時期だからこそ、日本の歴史や文化に触れ、あるいは平和学習など、知識と日本人の生き方を自ら感得する必要性が、グローバル化の中で改めて問われている。学校が求め、実施している旅行とはどのようなものか。目的や教育的意図、効果などを取材した。

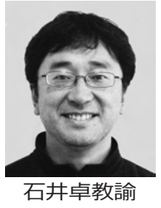
埼玉県立岩槻高等学校
広島・徳島　3泊4日
14年11月　実施

初めて雲海を経験

埼玉県立岩槻高等学校（神尾通明校長、生徒数953人）は、全国的にも「人形のまち」として知られるさいたま市岩槻区にある男女共学の高校。県内で唯一、国際文化科を設置しており、「毎日が国際交流」のキャッチフレーズのもと、高度な語学力が身につく授業を展開している。ここ数年は普通科でも国際交流を推進しており、語学力の強化を図っている。

教育理念は三本の柱で構成される。一つ目は目指すべき学校像として掲げる「確かな学力、規律ある生活態度、国際感覚を身につけた生徒の育成」である。実現のため、毎朝、ショートホームルーム前にプリント学習を行っている。二つ目は、生徒一人一人の希望進路の実現。三つ目は地域に愛される学校を目指し、地域の祭りへの参加などを伝統的に続けている。

佐藤哲平教諭


石井卓教諭

三ッ井良文教頭

民泊で心の交流を経験　地方の現実を見つめる

修学旅行については例年、平和学習、人権学習を基本テーマとしており、地域文化に触れることも重要な目的としている。

昨年は対象の2年生、8クラス、男女308人が11月9～12日に3泊4日の日程で、平和学習として広島、民泊目的で徳島を訪れた。同校が修学旅行として四国に行くのは初めてで、数年ぶり2度目の民泊となった。

今回、徳島の西阿波での民泊を選定した理由について石井卓教諭は「一般の旅行では絶対行かないようなところに連れて行き、二度とできないような経験をさせたいと思い、山深い西阿波での民泊を決めた」と述べる。ただ、四国であることや民泊について、生徒たちからは不平、不満を散々言われたと笑う。中には民泊先が山の中ということで、トイレが汲み取り式ではないかと心配して尋ねてきた生徒もいた。

埼玉県では修学旅行の下見旅行ができないため、担当旅行会社のJTBを通して、現地と綿密な打ち合わせを重ねた。

石井教諭は「下見ができなくなってから、新しい場所に行くのが難しくなった」と、修旅の現状について語る。民泊先での食物アレルギー、動物アレルギーなどについても入念な確認を行った。

平和学習としての事前学習は2年生になってから教科ごとに行った。また戦争経験者の講演会を開いたり、アニメ「はだしのゲン」の鑑賞を行った。民泊先に対する事前の準備は、写真付きで自己紹介の手紙を送った。

初日は新幹線で広島入りした。広島平和記念資料館に行き、平和記念公園では慰霊碑めぐりを行った後、宮島で宿泊。2日目は船で松山に移動する途中に、クラス別にみかん狩りやしまなみ海道でのサイクリング、松山城見学などを行った。夕方には徳島に入り、入村式を行った。

民泊受け入れ先の「そらの郷」は徳島県西部、剣山の山麓2市2町にまたがる大規模な体験教育旅行の受け入れ団体で、同校は70以上の家庭で、1戸2～6人ずつに分かれ、2泊過ごした。

3日目はまる1日、受け入れ家庭に生徒を任せ

間伐の手伝い

ヤギの散歩やエサやり

手作りこんにゃくの前で

イノシシ肉バーベキュー

唐辛子の収穫

や、ドラム缶の五右衛門風呂でもてなした家庭もあった。

「西阿波は山岳地帯のため朝になると雲海が現れる。関東平野で育った生徒たちは、初めて見る雲海に、雲の上にいると感動していた。一生の思い出になったと思う」と佐藤哲平教諭は語る。

どの生徒も受け入れ家庭の温かい雰囲気に素直に溶け込み、本当の親戚のように過ごしたようだ。「人生に迷ったときは片道切符でおいで。こっちで働きながら考えればいい」と言われ、感激していた生徒もいた。離村式では、泣き出す生徒も多かったという。

民泊を通じて地方の現状も感じたようだ。生徒が2人しかおらず、来年廃校が決まっている小学校や、近くに学校がないため車で通学している子どもたちがいることを生徒らは目の当たりにした。また高齢の夫婦だけの家庭を「寂しそうだった。だから孫が来たようにかわいがってくれた」と感じた生徒もいた。石井教諭は「限界集落に近い場所もあり、地方の過疎化を生で感じた一方で、地方では豊かな生活を送れることも実感できたと思う」と語る。

事後学習で行ったアンケートでは、旅行全体を通して民泊が一番心に残ったという結果になった。三ッ井良文教頭は「ふだんやんちゃな生徒も目を輝かせて受け入れ家庭の手伝いをやっていた。物見遊山の旅行とはひと味違う体験をさせられたと思う」と西阿波での民泊を高く評価している。

文京学院大学女子高等学校
長崎　4泊5日
15年3月　実施

民泊先の家族と笑顔で記念撮影

東京都文京区に所在する文京学院大学女子高等学校（佐藤芳孝校長）。これまで「理数」「英語」「特進」「文理」というクラス編成だったが、2015年度からは、力を入れてきた英語教育、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）としての理数教育、実績のあるスポーツ、この3分野でのコース別編成に移行する。従来同様、国際理解教育を中心に置き、従来以上に将来のキャリアを意識した教育を行うためだ。

毎年、修学旅行は2年次で実施している。行き先は、生徒が国内、海外のどちらかを選べるようにしている。選択制の理由を入江祥史教諭は「生徒と保護者の多彩なニーズに対応し、生徒の満足感を高めることを第一に考えている。無理やり海外旅行に連れて行く、国内旅行にしか行かない、というのではなく、私は

吉原ひろ子教諭

入江祥史教諭

家族として迎える民泊で　農漁村生活を肌で感じる

これがやりたい、こういうふうに考えている、それならそのニーズに合わせようというのが本校のスタンスだ」と明かす。

前年度は2年生約300人のうち、特進クラスと文理クラスの生徒41人が海外旅行のマレーシアではなく、国内旅行の長崎を行き先に選んだ。

実施は今年2月25日から3月1日までの4泊5日。自然観察や農林漁業体験、その土地の人々との交流を通し、長崎の歴史と文化を自ら学習する「体験学習」、原爆の実態を理解し、戦争の悲惨さと平和の尊さを知り、世界平和の必要性を学ぶ「平和学習」の二つを目的の柱としている。

特に、重きを置いているのが、北松浦半島での交流と体験。「松浦党の里　ほんなもん体験」と呼ばれているプログラムだ。松浦での修学旅行は13年度からずっと続けている。最初に松浦を行きで来た。熱意と行動力がすごい。これは間違いないと思い、プランを提案したのがきっかけだった」。

前年度の修学旅行は初日の2月25日、飛行機で羽田空港から長崎空港に到着し、展海峰、弓張丘を見学した後、夕方に鹿町小佐々地区の公民館で入村式と対面式。式を終えて、生徒たちは4、5人で1班となり、10組に分かれて松浦の民泊先の各家庭に入った。民泊先は農家もあり、漁家もあり、さまざまだ。

2日目は松浦で、そば打ち、田舎料理作り、港釣り、まゆ玉作りなど、地元の自然や文化、歴史をテーマにした各種の体験を行った。松浦で用意されている体験プログラムは84種類もある。この中から生徒の希望を聞き、希望の多かったプログラムをいくつか選び、午前と午後の2回に分けて実施した。

3日目は、午前8時半から離村式。その後、平和学習を目的として長崎市の平和公園、原爆資料館を見学。さらに、凧（はた）作りやガラス細工作りなどの体験も行った。

4日目は長崎市内での班別自主研修。宿泊先のホテルで、被爆者の語りの講話も聴く。最終日はハウステンボスを訪れて、飛行機で帰着した。

「体験学習の中でも民泊を重視していた」と語るのは、今回の修学旅行を担当した吉原ひろ子教諭。「修学旅行の目的は観光ではない。そこに行って現地の生活や周りの環境などを体験し、それを自分のものとして感じて帰ってくること。だから、松浦の方には生徒を家族として迎え入れてほしいとお願いした」と語る。

港での釣り体験

開村式の時には緊張していた生徒たち。だが、2泊する間に、民泊先の家の人から本当の子どものように温かく接してもらい、自分たちも食事作りや家業を手伝うなどしてすっかり打ち解けあった。各家庭では「これはここの名産だから食べなさい」などといろいろ世話をしてくれる。玉ねぎを作っている農家に泊まったある生徒は、「玉ねぎを生で食べたが、すごく甘くておいしかった」と喜んだ。小さな子どもと家の中でかくれんぼを楽しんだ生徒もいた。

「農漁村の生活を生身で感じて、生徒たちが得たものは非常に大きかった。家族の存在の意味を知るとともに、そこで自分自身の家族も思い出して考える。いろんな体験をさせてもらいながら、地域の思いやりによって自尊感情を高められる、非常にいい経験だった」。吉原教諭は松浦での民泊をこう評価する。

これまで国内を修学旅行先に選んだ生徒の理由としては、海外の食べ物が合わない、友人関係の問題で決めたというのがほとんど。しかし今回は、「海外はいつでも行けるが、知らない家に泊まるのはなかなかできないから九州を選んだ、という生徒が多かった」と吉原教諭も少し驚いている。

松浦の人と知り合え、家族の一員として接してもらい、仲良くなれた。離村式ではアコーディオンの伴奏で民泊の人々がみんなで町の歌を歌って送ってくれ、別れに涙を流す生徒も多かった。

例年、その2年生が3年生になって卒業する頃にお祝いの手紙をくれるという松浦の人々。同校は今年度も国内の修学旅行は松浦へ行く計画だ。

民泊先で作ったシフォンケーキ

まゆ玉作り

押し寿司作り

映画村の体験学習
本物と自然と昔にこだわる

殺陣講座　東映京都撮影所の殺陣師や俳優が立ち回りの形をお教えします。もちろん安全性は十分配慮しています。木刀を使用した殺陣の体験を通して時代劇の魅力に触れてください。

ドラマ映像講座
【講義編】シナリオの基礎から撮影・編集の専門知識まで、一歩踏み込んだドラマの映像作りを学んでいただきます。
【撮影編】監督・助監督・撮影・照明・録音など、スタッフ役と出演者役にグループ分けして簡単な撮影を相互に行います。

清水焼絵付け体験
【染付】素焼の生地に絵付けをしていただきます。染付の色はグレーと茶色の2種類あります。
【京焼】白色系に焼き上げた器やグラスに3～5色のカラーを使って絵付けをしていただきます。

京扇子・京うちわ手描き体験　舞踊や茶道にも欠かせない扇子やうちわは京都の伝統産業のひとつです。専門家の指導のもとにオリジナルの絵柄を描いて楽しんでください。

※体験学習は全て有料・要予約となります。

体験学習のパンフレット・DVDのご請求、お問い合わせ、お申し込みはこちらまで!
TOEI KYOTO STUDIO PARK
東映太秦映画村
http://www.toei-eigamura.com
〒616-8586　京都市右京区太秦東蜂岡町10番地
ナビダイヤル ℃0570-064349　お問い合わせ ℃075-864-7716
営業時間 /9:00～17:00（3～7、9月の平日と10、11月毎日）
9:00～18:00（3～7、9月の土・日・祝と8月毎日）
9:30～16:30（12～2月の平日）
9:30～17:00（12～2月の土・日・祝）
休村日 /2016年1月18日～22日

今だからこそ、福島で学ぶ旅を!
Future from Fukushima.
ふくしまからはじめよう。
福島県には、子どもたちが自ら考え、気付き、行動する「生きる力」を育むための教育旅行コンテンツがたくさんあります。
県では、教育旅行特設サイト「ふくしま旅支度」を立ち上げ、これから教育旅行の準備をはじめる先生方や営業活動をされる旅行会社の方を全力でサポートしていきます。

福島県のワンストップ窓口
（公益財団法人 福島県観光物産交流協会内）
TEL:024-525-4024
福島県観光交流局観光交流課　〒960-8670 福島県福島市杉妻町2-16
TEL:024-521-7398　FAX:024-521-7888
県内にある体験プログラム受入団体の情報を集約し、ワンストップで先生方や旅行会社の方からのお問い合わせ、資料請求にお応えします。
詳しくはコチラ
ふくしま教育旅行　検索　福島県教育旅行ホームページ　http://www.tif.ne.jp/kyoiku/
ふくしま旅支度　検索　先生たちのふくしま旅支度　http://www.tif.ne.jp/tabijitaku/